

研究課題	普通教室において、IC レコーダーを活用して英語スピーキング力を高める研究
副題	～教科書を使用したリテリング活動を通して～
キーワード	リテリング・ジグソーリーディング・発話の振り返り
学校名	京都府立桃山高等学校
所在地	〒612-0063 京都府京都市伏見区毛利長門東町 8
ホームページ アドレス	http://www.kyoto-be.ne.jp/momoyama-hs/

1. 研究の背景

センター試験は 2020 年度（2021 年 1 月）から「大学入学共通テスト」（仮称）に変更され、英語においては、センター試験の「読む」「聞く」における 2 技能の測定から、「聞く」「読む」「話す」「書く」における 4 技能の評価が可能な民間の資格・検定試験の活用へと段階的に変わることになっている。

文部科学省が報告した「平成 29 年度英語力調査結果（高校 3 年生）」によると、CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）A2 レベル以上の割合が、「聞くこと（33.6%）」、「読むこと（33.5%）」、「話すこと（12.9%）」、「書くこと（19.7%）」である。特に、「話すこと」と「書くこと」の割合は全体的に低く、無得点者もそれぞれ 18.8% と 15.1% であり、「話すこと」と「書くこと」の課題が大きいことが判明し、アウトプット力の育成指導に課題が見られる。

本校では、新テストを意識し、アウトプット力の育成を重視した英語教育を行っており、ペーパーテストでは測れないスピーキング力をパフォーマンステストという形で測っている。また、4 技能型 GTEC の全員受験を実施するなど発信型英語教育への取り組みを進めている。

授業中にアウトプット活動を行うときには、例えば、本文の内容について英語で話させたり、書かせたりする活動が考えられる。ライティングの場合はいったん文字を書けば、それを見て振り返りを行うことが可能だが、スピーキングの場合は録音できる機器がなければ、自分の発話を振り返ることができないという問題点がある。CALL 教室があればそれが可能となるが、本校にはその設備がない。また、1 クラス分の iPad を購入することを考えてみると、それらを休み時間中に普通教室に持ち運びするのは難しい。そのような問題点を解決するために、カゴに入れて容易に持ち運びができる IC レコーダーの使用を考えた。普通教室の中で IC レコーダーを用いて発話を録音し、スピーキング力の育成を目指す実践はこれまでの英語教育ではほとんど行われていなかったもので、4 技能統合型授業の 1 つのモデルになり得ると考え、本研究課題を設定した。

2. 研究の目的

近年、「コミュニケーション英語」の授業では、理解したまとまりのある英文の内容について、その英文を見ないで、本文に関連するキーワードや絵などの手がかりを用いて他の学習者に英文の内容を伝えるリテリング活動を導入した実践が増加している。検定教科書やその付属資料にもリテリング活動を目的としたものが見られ、この活動に対する関心が高まっている。本校でも、第二言語習得研究における認知プロセスの大きな枠組みである『「インプット」→「インテイク（内在化）」→「アウトプット」』の流れを意識した指導をする中で、インテイク活動である音読を授業のゴールに設定するのではなく、その先にある「アウトプット」をゴールに設

定し、理解した英文を自分の言葉で伝えるリテリング活動を授業内で積極的に取り入れている。IC レコーダーがあれば、生徒達は自分の発話を録音でき、その場でイヤホンを用いて聞き返し、誤りの発見や修正を行うことができるだけでなく、同じタスクを複数回行うときには、自分の複数回の発話を比較分析することができるので、「流暢さ」と「正確さ」といった発話の質の変化を把握できる。本研究では、IC レコーダーを用いて、一定期間リテリング活動を行うことで、生徒のスピーキング力が高まるのかについて、「流暢さ」に焦点を当てて検証することにした。また、スピーキングに対する情意面がどのように変化するのかを質問紙調査で検証した。

3. 研究の経過

本研究の経過を以下の表1にまとめる。研究対象は本校1年生9クラス（277名）であるが、分析対象としたのは、IC レコーダーを常時使用できた2クラス（80名）とした。

表1：研究の経過

時期	取り組み内容	評価のための記録
6月上旬	●スピーキング力の調査（事前）	○スピーキング課題
	●スピーキングに対する情意面の調査（事前）	○質問紙調査（7件法）
6月中旬	IC レコーダーの使い方指導	
7月	L3 A Canoe Is an Island	Crown English Communication I New Edition（三省堂）を使用。
8月	L4 Seeing with the Eyes of the Heart	
9月	L5 Food Bank	
10月	L6 Roots & Shoots	
11月	L7 Paper Architect	
12月	L8 Not So Long Ago	
1月	L9 Crossing the “Uncanny Valley”	
1月下旬	●スピーキング力の調査（事後）	○スピーキング課題
	●スピーキングに対する情意面の調査（事後）	○質問紙調査（7件法）
	●リテリングについての意見調査	○質問紙調査（自由記述）
	●IC レコーダーについての意見調査	○質問紙調査（自由記述）

「スピーキング課題」は、英検2級2次試験の過去問題を使用した。3コマの絵を口頭で描写するものである。手順は、30秒間準備した後に、40秒間、発話を録音した。

Your story should begin with this sentence: One day, Kenji was at home drinking tea from a large plastic bottle.



「スピーキングに対する情意面の調査」は、各質問項目を自己決定理論に関連させた加藤（2012）の質問紙を参考にして7段階のリカートスケール〔1:まったく違う/2:違う/3:やや違う/4:どちらでもない/5:ややその通り/6:その通り/7:まったくその通り〕による質問紙を作成した。また、「リテリングについての意見調査」と「ICレコーダーについての意見調査」は自由記述とした。結果は「5. 研究の成果」に記載する。

4. 代表的な実践

本研究の授業展開は以下の2つに分けられる。

<基本的な授業展開> ※本研究では、L3、4、5、9で実践した。

- (1) 語彙指導 — リテリングのために、日本語を見て英語が言えるように指導する。
- (2) 内容理解① — 教科書を閉本して IC レコーダーにある本文の音声を聞いて、内容に関する質問に答えさせる。次に、教科書を読んで同じ質問に答えさせる。[リスニング→リーディング]
- (3) 内容理解② — 本文にある複雑な構造を持った文などを解説したプリントを配布し、必要な解説を行う。
- (4) 音読 — 様々な音読法を用いて、発音の強化と言語材料のインテイクを行う。
- (5) リテリング — パートごとにキーワードを自分で選び、絵や記号なども追加してリテリング用メモを作成させた後で、個人で IC レコーダーに録音させ、イヤホンを用いて自分の発話を聞いて振り返りを行わせる。これを数回続けた後に、ペアでリテリングを行わせる。

また、グループを形成して、グループ内の生徒と IC レコーダーを交換して他の生徒の発話を聞き、良かった点、修正点、改善方法を話し合わせることで、協同学習の視点を取り入れることもできる。

- (6) 即興的なアウトプット活動 — 本文の内容に関連した身近な質問を投げかけて、即興的なスピーキングをさせ、IC レコーダーに録音させ、振り返りを行わせる。

<ジグソーリーディング> ※本研究では、L6、7、8で実践した。

- (1) 語彙指導 — 全パートの語彙について日本語を見て英語が言えるように指導する。
- (2) 担当パートの割り当て+内容理解 — 1人ひとりに担当パートを割り当て、その担当パートのみ「基本的な授業展開」と同様のやり方で内容理解を行わせる。ただし、教師の解説は行わない。

- (3) リテリングの練習（個人） — 個人で音読を何度もさせる。その後に、リテリング用メモを作成させて、IC レコーダーに発話を数回録音させながら、振り返りを行わせ、リテリングの質を高めさせる。
- (4) リテリングの練習（グループ） — 担当パートが同じ生徒をグループにして、お互いのリテリングの良かった点、修正点、改善方法を話し合わせる。
- (5) リテリング本番 — 担当パートが異なる生徒をグループにして、内容の順番通りに 1 人ずつリテリングさせ、自分の担当パート以外では、メモを取りながら聞かせる。
- (6) TF 質問 — すべてのパートに関する TF 質問（1 パート 6 問程度）が書かれたプリントを配布し、グループでのリテリングで聞き取ったメモを参照しながら解答させる。解答の仕方は、T が本文の内容と同じ、F が本文の内容と異なる、N (No information) が他の生徒のリテリングでは発話されなかったものとする。グループで正解数を計算させ、どのグループが一番上手にリテリングをすることができたかを競わせる。また、パートごとの一番得点の高い生徒も発表する。



5. 研究の成果

(1) スピーキング力の調査

スピーキング課題の結果を以下の表 2 にまとめる。ただし、事前テストと事後テストのどちらかを欠席した生徒は除外した。分析方法としては、録音した発話を書き起こした 40 秒間での「発話語数」と「文の数」の平均値を産出した。

表 2：スピーキング課題の結果

	事前テスト（6 月）	事後テスト（1 月）
発話語数	34.25 (9.53)	43.93 (6.97)
文の数	2.83 (1.04)	3.96 (0.94)

注) N=76, 平均（標準偏差）

統計分析の結果、事前テストと事後テストの発話語数の平均の差において、有意差は認められなかったが、効果量は大であった。また、文の数の平均の差において、1 %水準での有意差が認められ、効果量は中であった。これらの結果から、IC レコーダーを活用した授業により、スピーキングにおける「流暢さ」が高まったことが示唆された。

(2) スピーキングに対する情意面の調査

「リテリング」と「即興的なスピーキング」に関する質問項目をそれぞれ 3 つ作成し、その結果を以下の表 3 にまとめる。

表3：スピーキングに対する情意面の調査結果

質問項目	6 月	1 月
1 リテリングは集中してできる。	3.88 (1.35)	5.01 (1.13)
2 リテリングは楽しみにしている。	2.84 (1.40)	4.05 (1.22)
3 リテリングは「できた」という充実感が得られる。	3.14 (1.42)	4.54 (1.31)
4 即興的なスピーキングは集中してできる。	4.32 (1.40)	5.09 (0.98)
5 即興的なスピーキングは楽しみにしている。	3.16 (1.60)	3.88 (1.43)
6 即興的なスピーキングは「できた」という充実感が得られる。	3.97 (1.56)	4.47 (1.44)

注) N=76, 平均 (標準偏差)

統計分析の結果、質問項目1～6全てにおいて、1%水準での有意差が認められた。効果量は質問項目1～5は中、質問項目6は小であった。これらの結果から、ICレコーダーを活用した授業は、リテリングや即興的なスピーキングに対する情意面に肯定的な影響を及ぼすことが示唆された。

(3) リテリングについての意見調査 (一部)

- 自分の力で要約してまとめるのが難しかった。何回も読むことで内容がよく分かったし、それを伝えるために伝え方の工夫を考えて実行することができてよかった。
- 班ごとでTFの正解数を競い合うなど、楽しみながら活動ができた。理解だけでなく、他の人にそれを伝える力も向上した。リテリングはかなり難しかったが、それだけ力が付いたと思う。
- リテリングは相手に分かりやすくスピーキングをすることや相手のスピーキングの内容を聞き取る力が鍛えられると思いました。グループでの学習は個人とは違い、コミュニケーション力も向上するのでとても良いと思いました。

(4) ICレコーダーについての意見調査 (一部)

- 自分の発話を振り返ることができるから、どこをどう改善したらいいのか分かりやすい。
- 自分の発話を録音して聞くことができるので、発音の間違いなどが分かる。
- 自分の声を録音できることで、発音や正しい表現を使えているかどうかを確認できるので、スピーキングの力は以前よりも向上したと思った。
- 私が一番いいなと思ったのは、自分で考えて話した英語が録音できて、それをまた聞けるという機能です。今までこんな授業をしたことがなかったので、とても英語力upになったと思います。
- 教科書の音声を聞くときに、全体の授業では最後まで聞き終えないと2回目は聞けないが、ICレコーダーがあれば聞き取れなかったところまで戻って聞くことができる。
- 自分のペースで音を聞けて、速度も変えられるので、英文が易しいときは速いスピードで聞いたり、逆に難しいときは遅い速度で聞いたり、いろいろな使い方ができると思います。

6. 今後の課題・展望

本研究では、ICレコーダーを用いて、一定期間リテリングを行うことで、生徒達のスピーキング力が向上す

るのかについて、「流暢さ」に焦点を当てて検証したが、語彙や文法使用の誤りといった「正確さ」については検証していない。これは、「流暢さ」と「正確さ」はいわば「トレードオフ」の関係であることが主な理由である。つまり、「流暢さ」を求めれば求めるほど、誤りが多くなるという関係である。しかし、「流暢さ」がある程度高まれば、「正確さ」も追及するべきであるのは当然のことであり、この点が今後の課題となる。

また、英語による発話の前に、日本語による発話をさせて、その両言語での発話を比較分析することで興味深い結果が得られる可能性があると考えている。日本語による発話が英語による発話に肯定的な影響を及ぼすのであれば、英語によるアウトプット活動全般において、日本語による発話の有効性を証明できるかもしれない。

7. おわりに

現在、多くの公立高校では、予算不足のために、教室内にプロジェクターや電子黒板などの発信型英語教育を加速できる設備が整っていない。しかし、グローバル化がますます進む現代において、「英語が使える日本人」の育成は重要課題の1つであり、多くの英語教師は、その課題解決のために創意工夫を行っている。本研究では、比較的低予算で購入できる IC レコーダーを用いた実践を行い、その結果、「流暢さ」が高まり、スピーキングに対する肯定的な情意面の変化も見られ、1つのモデルを示せたように思う。学校で IC レコーダーを購入できなくとも、入学時に個人で購入させることができれば、家庭学習としての使用も可能となり、スピーキング力をより強化できる指導計画を作成することもできる。本研究をきっかけとして IC レコーダーを用いた実践が広がっていくことを期待している。

8. 参考文献

- 加藤澄恵 (2012)「学習活動が英語学習者の内発的動機に与える影響の検証」『言語文化論叢』第6号 9-22. 千葉大学言語教育センター
- 文部科学省 (2018)『平成 29 年度英語教育改善のための英語力調査 事業報告』